

題名がここにある

大村伸一

まさか題名がここにあるという題名ではないはずだ。それが題名だとすれば、題名のあ
るべき場所にあるその文は、すなわちそこに題名がないということの意味するのではない
だろうか。確かに題名が題名がここにあるであると言われれば文が題名であるような題名
の小説もなくはないのだからそれは題名ではないと否定することはできないようにも思う。
だが、そもそもここはどこなのだろうか。ここは題名がここにある八文字の書かれてい
るその場所のことなのだろうか。それとも他でもないこの二文字の書かれているその場
所なのか、あるいはこの文の書かれている場所とは無関係などか他の場所なのか、それ
がよく分からない。ここがどこなのか分からなければどれが題名なのかも判然としないだ
ろう。

ここにあるとかここがどこだとか幾度も書いているけれどもこの文のここは最初の題名
はここにあるのここと同じここなのかどうかと問われれば同じではないかもしれないと答
えるしかない。そもそも最初の題名はここにあるのここがどこなのかが分からないのだから、
それ以外のここがああ最初のここと同じここであるわけがないだろう。だとすれば最
初の題名はここにあるのここについて語るとき、はっきりと最初の題名はここにあるのこ
こと書くか、単にそこと書くしかないはずだ。あるいは、あのここという言い方のほうが
分かりやすいだろうか。そうすると、題名はそこにあるという言い方も場合によっては許
されるのかもしれない。

さてこのような事情を考え合わせてみれば、題名は今はまだないのだろう。どこにある
のか分からない題名がそこにあるとは言い難い。今は題名はそこにはないのだろうが、それ
でもいずれ題名は明らかになるのだと思う。最後まで題名がそこにはないなどということが
あるだろうか。正直なところ、そんな場合もないとはいえない。すべてが終わったあとに
題名がそこに現れるのかもしれない。それはまだわからない。それはすべてが終わるまで
は分からないはずだ。案外、話半ばにして突然題名がそこに現れるということもないとは
言えないだろう。そのここがどこなのかが分かればという話だ。だとすれば、題名がここ
にあるようになるまでは題名がそこにあることにして話を進めてみようかと思う。そんなこ
とをすればいつか不都合なことがおきるのかもしれないけれど、それでも始めなければい
つまでも題名はそのここにはないままになるだろう。それもまた不都合な話だ。始めたから
といって題名がここにあるようになるとは限らないのだろうが、始めてみることにしよう。

題名はいくつかあったと思う。もう思い出すこともできないが、夥しい数の題名があっ
て、その中から一つを選ばなくてはならなかった。あまりにも題名が多かったので、この
題名とあの題名はいったいどこが違うのだろうかと幾度も考え込まなくてはならなかった。
そんなふうによく似た題名ばかりだった。無数の題名を読み記憶し比較し続けているとや
がてどの題名も同じだとしか思えなくなってしまうものだ。それでもどこかに違いがなく
てはならないと聞いていたので、違いを探し続けていた。結局、違いを見つけられたのか
見出すことができなかつたのかさえ覚えてはいない。それに違いのことばかり考えていた

ので、題名それ自体のことはすこしも思い出せない。

いや、そうではなくて、ずいぶん長い間、題名などひとつもなかったのだ。題名などというものが必要だということさえ知らなかった。題名や題名がないことに無頓着だった。それはそれで幸福だったのかもしれない。ああ、ここでうっかり幸福という言葉を出してしまったが、私には幸福という言葉の意味が分からない。意味が分からないのだから、本当に幸福だったのかどうかなど分かりようがないではないか。だとすれば、ここで幸福などという言葉を使ったことは失敗だったのだろう。私は小説として取り返しのつかない間違いを犯してしまったのではないだろうか。だとすれば、ここで直ちに終わりにすべきなのかもしれない。終わりにすべきだろうか。あるいは書き直して続けるべきだろうか。私には分からない。もう少し続けてみよう。それから、どうしても題名が必要だと言われ、何か題名となるべきものを探していたのだった。どんな題名でもいいとも言われていたのだから、最初に見つけ出した題名にすればそれで済むような話なのだが、そうなるまでどれだけ探してみてもどんなありふれた題名さえも見つけられなかった。もともとなかったのだから、見つけようなどなかったのだろう。

それにしても題名がひとつもないなどということがあつたものだろうか。題名のないまま何かを始めることなどできるのだろうか。確かにこうして始まっているからには実は題名などないまま始めることはできて、そのようにして始まっているということなのだろう。あるいは、ずいぶん長い間題名がないままだったのだから、その間、本当は何も始まっていなかったのかもしれない。いや、やはりここに題名があるが題名だったのであり、題名があるからこうして始めていられるということなのだろうか。様々な可能性はあるのだが、題名はないということにして始めたのだから題名がないままに始めることができると考えるべきなのだろう。

無数の題名があつたにしろ一つもなかったにしろ、何一つ覚えていないのだから結局は同じことだと思ふ。だとすれば、題名はやはりまだないのだろう。題名はここにはないのだろう。最初の題名はここにあるのここにはまだ題名はないという意味である。とはいえ、本当は題名が決まっています、他でもないあのここに確かに題名があるのだということも考えられなくはない。そして、私にはその題名が知らされていないだけだという可能性もある。何故なのかは分からない。何かの試験のようなものなのだろうか。それとも、他の小説であつても登場人物には題名は知らされないものなのだろうか。あるいは、何かわざとわたしに知らせていないということなのだろうか。わざと知らされていないのだとすれば、そこには何か悪意のようなものがあると考えてもいいはずだ。それがどのような意図を持つ悪意なのかは想像もできない。そもそも悪意が何なのかが分からない。うっかりと悪意という言葉を出してしまったが、私は悪意という言葉の意味を知らないのだから、その悪意の意図など分かりようがない。だとすれば、私はここで悪意などという言葉を使うべきではなかったのだ。取り替えようのない言葉を使ってしまったというわけだ。だとすれば、ここで直ちにすべてを終わりにすべきなのかもしれない。何故そう考えるのかはよくわからないが、終わりにしたいという気持ちはいや増すばかりだ。とはいえ、たった一つの言葉の意味を知らないからといって、すべてを終わらせてよいものなのかどうかは判断に苦しむ。一つではなくて二つだったかもしれないが、そんなに違いはないと思ふ。だとすれば、もう少し先に進めてみるしかないだろう。そして、題名のことを話題にするのは控え

よう。そのような事情なのだとすればことさら題名のことを語るのはやめたほうがいいはずだ。題名について語ることはやめよう。題名は知らないままで先に進めよう。

栗田甘露のことを覚えているだろうか。まだ学生である甘露は二十三冊の帳面を持っていて、帳面にはどの頁にも比較的小さな文字で海に潜む危険についてが書かれていたのだった。熱帯の海から極地の海まで、海水の塩分に含まれる危険から深海の生物が生まれながらに持つ危険まで、手のひらの上にある海から天空に浮かぶ海まで、およそありとあらゆる海の危険についてが書かれていたのだった。栗田甘露が一度も海の話をしなかったことを思い返せば、甘露が海を旅したことなどなかったことは分かるだろう。なにしろ大勢の友人、つまり上顎炊、喉見附付近、平枚樺、その他三名の前で実は泳いだことはないのだと打ち明けていたではないか。

帳面はずいぶん以前に亡くなった叔父から譲り受けたものである。譲り受けたのは甘露がまだ子供だった頃で、それ以来、その帳面のあらゆる頁を栗田甘露は幾度も読み返し、学生になる数年前には最初の文字から最後の句点まですべての文字および記号を誦んじることができた。甘露が海の危険について話す文字および記号を聞いたこともあるだろう。それはその帳面に書かれていたことだ。そして、書かれた文字および記号のすべてを記憶してからは、甘露がもはや海に潜む危険など少しも危険だと思わなくなっていたことは容易に想像出来る。とはいえ、叔父に言わせればその文字および記号を記憶しただけでは危険はなくなるのだし、文字および記号を知ることによって危険を甘く見るようになるがゆえにかえって危険はいや増すのである。そんな叔父の苦言に対して、甘露は世界は文字および記号で書かれているのだから危険もただの文字および記号なのであり、当然、文字および記号には読めなくなるという危険以外にどんな危険もありまないと口答えをしたこともあった。その口調に叔父が大笑したことはここに初めて書くことになる。そのせいもあるのだろう、甘露はいずれ船で世界を旅したいと思っている。世界一周の旅をしたいと思っている。何故なのかは分からない。

ここに初めて書くと書いたのでようやく思い出したのだけれども、栗田甘露のことはこれまで一度も語ったことなどなかったのだった。あなたが栗田甘露を覚えていなくても忘れていたわけではないのだと言っていいだろう。いや、あなたがこれを二度目に読んでるのであれば栗田甘露のことを覚えているかもしれない。勿論、覚えているはずだ。案外、一度目に読んだ時はあまりにも退屈だったので読んでいたといってもほとんど眠っていたという可能性はあり、その場合には栗田甘露のことは一度読んでいたとはいえそれは夢の中の出来事でしかなく、今となっては聞いたこともないという印象しか残っていないということもあるだろう。それを印象だと言うのだとすればである。だとすれば、二度目である今回も眠りながら読んでいたという可能性の方が高いのではないだろうか。これもまた夢の中の出来事というわけだ。勿論、一度読もうとしてはみたものの、あまりにも退屈だったので最初の行の二文字目あたりで眠ってしまったというのであれば、そんなものをもう一度読もうとすることなどないかもしれない。そのあと数百文字も後に栗田甘露の記憶について尋ねられたことすら知らないままかもしれない。おそらくそうなのだろう。ここに書かれていることのすべてとあなたは無関係なのだろう。

いや、一度目は眠ってしまったから今度こそ最後まで眠らずに読もうとしているのがあ

なただろうか。いや、読もうとして眠ってしまった小説を改めて読もうとするものだろうか。私はそんなことはしない。だから、誰かがこの小説を二度も三度も繰り返し読むなどということがあるとは思えないのではあるが、案外、そんなこともあるかもしれない。もしも何度も読み返しているのなら、栗田甘露のことはすべてを記憶していることになるだろう。幾度読み返しても甘露についての知識が増えることなどないようにも思うが、不思議なもので、読み返せば読み返すたびに、栗田甘露に以前とは違った側面があることに気づくらしい。今度の栗田甘露は以前知っていたあの栗田甘露とは別の深みを持った人物であるということに気づく。そういうことがよくあるらしい。信じがたい読書体験である。もしそうなならば、失礼ながらと前置きをして、おそらく、あなたは同じ小説を読んでいると思っていたのかもしれないが、実は異なる小説を手にとっていたのだと指摘するしかないだろう。同じ栗田甘露だと思っていたが、実は栗甲甘露であるとか西日露吐であるとか案外、木口二口であるとかいった名前の人物と取り違えていたということなのかもしれない。

ありえない話ではあるが、最初の時には最後までとどこおりなく読み終えていて、そして再び読み始めたのだというあなたであれば、あのここに題名があるのかどうかなどもう分かりきった事実になっているだろう。それどころかそのここにある題名すらすでに知っているのかもしれない。もしもそうなら、その題名を私の耳にささやいてみてはもらえないだろうか。私にも題名を知りたいという気持ちはある。その好奇心しか持っていないと言ってもいいかもしれない。ああ勿論、私には耳はないのだし、ささやきを聞くこともできはしない。私にはその題名を知る機会はないのである。私は題名を知ることなどないのかもしれない。

それでもまだ題名があそこにあるのかどうか、あなたが知らないというのであれば、これは本当に題名などないという可能性が高まるだろう。あなたが以前はそのここにある題名を知っていて、再び読み始めたときには忘れていたというのであれば、題名はまだあるのかもしれないが、一度知った題名を忘れてしまうことなどありえない話だ。一度だけでなく、何度読み直しても題名を覚えられないのだとしたら、それは題名がないというよりも、記憶に関する病気にかかっている公算が強い。病気という言葉の意味がよくわからないので自分でも何を書いているのか判然としないのだが、もはやほとんどの言葉に意味などないような気さえするので、続けるしかないだろう。

さて、よく考えてみれば明らかに、誰かが栗田甘露のことを忘れていようが覚えていようが栗田甘露の記憶にはすこしも変わりはないはずだ。誰かが忘れていたために、かえって甘露の記憶力がいやまし、甘露はその帳面に書かれていなかった文字および記号まで暗唱したなどという話があるとは思えない。だが勿論そんな話があったのである。あなたは覚えていないだろうが、その話は何千文字にも及び、また多くの者がそこで眠りについた。その話を覚えているのは私だけだろうと思う。だから、あなたの記憶があるいはその記憶が失われたことが、あるいはもともとそんな記憶などなかったことが、栗田甘露の記憶力をいやまし、甘露はその帳面に書かれていなかった文字および記号までをも暗唱したのであるが、そもそも、そのどこが特別なのか私には分からない。誰でもどこにも書かれていない文字および記号を暗唱しているのではないのだろうか。私はそういうものだとか誰かに教えられたような気さえする。

とはいえ、もともとは、甘露の記憶が問題なのではなく、読者みなさんの記憶が問題なのであった。栗田甘露のことを覚えているのかいないのか。それが問題になっていた。だとすれば、忘れられているのは栗田甘露なのだから甘露の記憶など問題になるわけがないのである。むしろ、忘れられていることを甘露が記憶していて、何故か忘れられたくないと思い始めた甘露は、帳面に書かれていない言葉や記号を暗唱し、注意を惹こうとしていたのだろう。ことほどさように、そのような栗田甘露には何一つ落ち度はないと言える。だから、問題があるのは、読者みなさんの記憶であると考えしかるしかない。一度も読んでいないにしろ、繰り返し読んだにしろ、栗田甘露を覚えていたりいなかったりするあなたが、そのあいまいさが問題なのである。

いや、そもそもそれも問題とする必要はないのかもしれない。栗田甘露のことなど一度も話したことがないということをおぼえていたのは私であり、あたかもあなた方が甘露のことを覚えていると思込んでいたのも私なのだから、過失は私にあり、だとすればそもそも問題などどこにもないような気がする。そうすると、何故、私は記憶を問題にしようと考えたのだろうか。結局、何も問題にする必要はなかったのだろうか。何故、問題のことを問題にしてしまったのだろうか。どこにもない問題のことを問題にしても何も変わらないはずだ。

おそらく、そもそも栗田甘露の話をはじめてしまったことが原因なのだろう。栗田甘露の話をはじめるときではなかったのかもしれない。栗田甘露のことを覚えているかどうかなどと質問したことが間違いだったのだ。栗田甘露の話をしていなかったことにして、もう一度どこかから始めればいいのだろう。それができるものならばやり直すことにしよう。勿論、すでに何百回も書き直している記憶がある。あなたは覚えていないかもしれないが、私はかなり覚えている。あなたが何度読み返していたとしても、あなたの記憶には残っていないだろう。私はすべてを覚えている。そういうものだ。

だがもうこれで終わりである。普段は、終わりがきいていることに誰も気づいたりしないものだが、ここでは明確に終わりが分かる。それはおそらく、題名がどこにあるのか分からないからだろう。確かに、まだ、あのここがどこなのかは判然とせず、どこの何が題名なのかも分からない。最初の頃は、これが終わった後に題名が現れるのではないかと空想したりもしたが、そろそろその可能性を確かめるべき時なのではないだろうか。だとすれば、はっきりとここで終わりだと書かなくてはならないだろう。そうでなければ、題名はいつまでも登場できずにいることになるだろう。ゆえに、これで終わりである。

さて、小説は終わったが、題名は現れただろうか。

ここに千行が書かれそれから削除される間、題名の有無を確かめるために何度も読み返してはみたものの、どうも題名がどこかに現れたという気配はないようだ。やはり題名など、どこにもなかったということだろう。そして、終わった後にも題名は現れなかった。確かに、何年かして、ある日唐突に題名が出現するという可能性は排除できない。とはいえ、今、この時、題名はないとしか言えない。今とかこの時という言葉にどういう意味が

あるのかは分からないが、そう言うしかないことは知っている。勿論、小説でそのような言葉を使うことは失敗なのかもしれない。そう言われても反論することができない。だが、もう小説は終わっているのである。終わった後に、どれだけ間違えようと、もうここで終わりにすることもできない。すべてはすでに終わっているのである。

すべてが終わった今、ようやく気がついたのだが、あの題名がここにあるのことは、この小説全体を意味していたのかもしれない。だとすれば、この小説それ自身が題名だということになる。確かにそれなら題名はここにあることになるだろう。それなら何の不都合もおきないだろう。それに、そんな小説もないではないことは知っている。いや、知っていると書きはしたが、そんな小説はひとつも知らない。何故、知っていると思ったのかは分からない。とはいえ、そんな小説がないのであればそんな小説があったとしてもまずまず何の不都合も起きないだろうことは確かだ。おそらく題名があろうがなかろうが、どちらにしろ不都合なことなど何も起きなかったのだろう。だとすればこう書くしかないことになる。題名はここにはない。